中国国際交流員からの文化発信情報誌

Vol.26
2024.May

わくわく中国文化

―中国の世界遺産②―

Illustration by KOH_HSL(instagram)

中国の世界遺産②

佐世保市の友好交流都市である瀋陽市は遼寧省の省都です。瀋陽市は人口が約914万人で、面積が1.28万平方キロメートルです。旧称は盛京・奉天でした。

瀋陽市は中国国家級歴史文化名城で、清王朝の発祥地です。“**一朝发祥地，两代帝王都**”(清王朝の発祥地、二代皇帝の都)と称されます。今回、二回目は瀋陽市の世界文化遺産を見てみましょう。

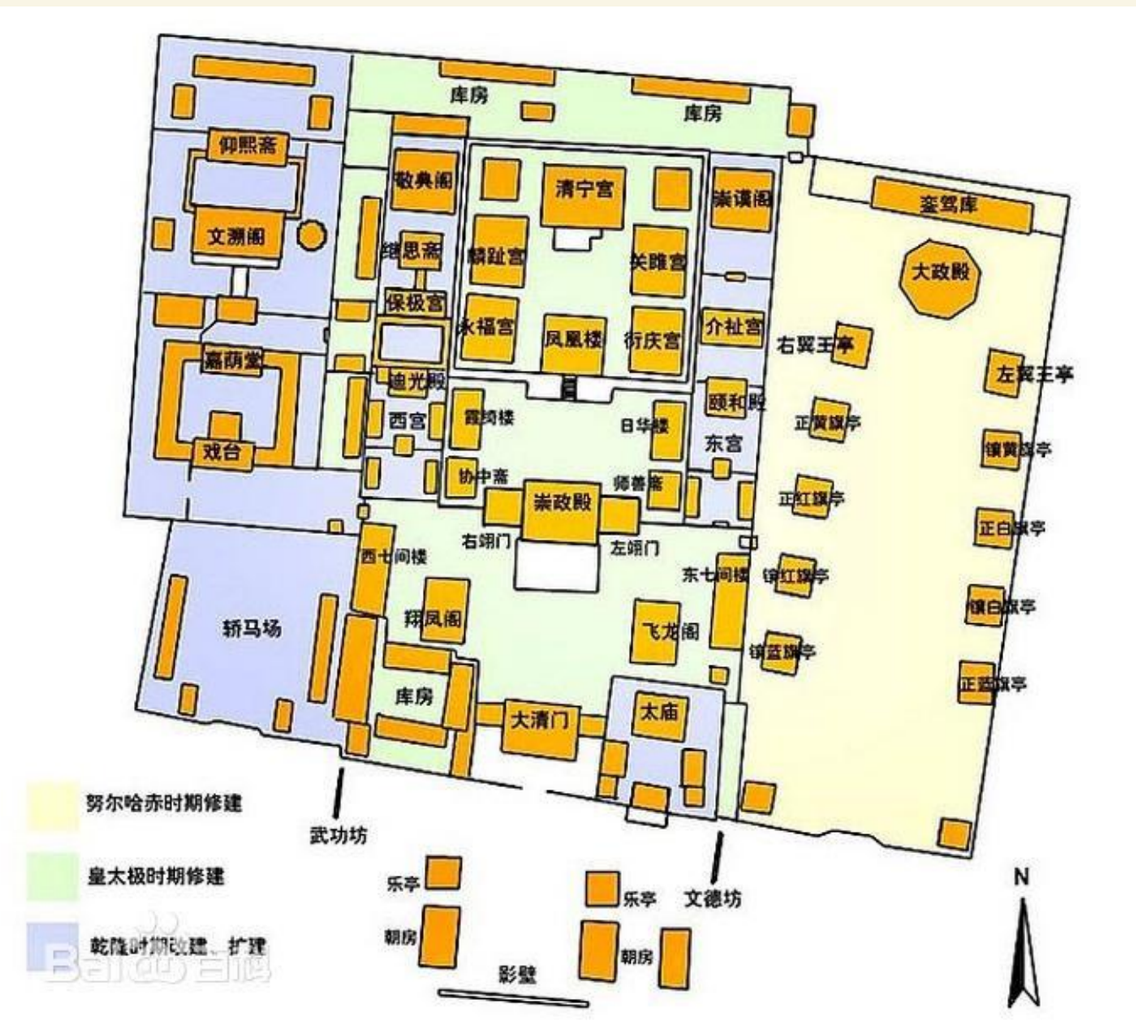
瀋陽市は清の時代の瀋陽故宮・福陵・昭陵を合わせて３か所の世界文化遺産を有します。

1)瀋陽故宮

瀋陽故宮は現存するものでは清代最古の宮殿建築です。1625年から造り始め、1636年に完成しました。面積は63272平方メートルです。中国に現存する二つの皇宮建築群の一つだけではなく、中国関外(*山海関より東側を「関外」もしくは「関東」といいます)唯一の皇宮建築群です。

瀋陽故宮は建築の配置と年代からみれば、３つのエリアに分かれています。それぞれは東ルート、真ん中ルート、西ルートです。

a.東ルートには清太祖ヌルハチが1625年から建て始めた大政殿と十王亭があり、そのうち、大政殿は瀋陽故宮の代表的な建築です。清太宗ホンタイジが重大な祭祀を行う場所でもあれば、重要な政治活動の場所でもあります。清の三代目皇帝順治帝(じゅんちてい)も大政殿で即位しました。



a.大政殿

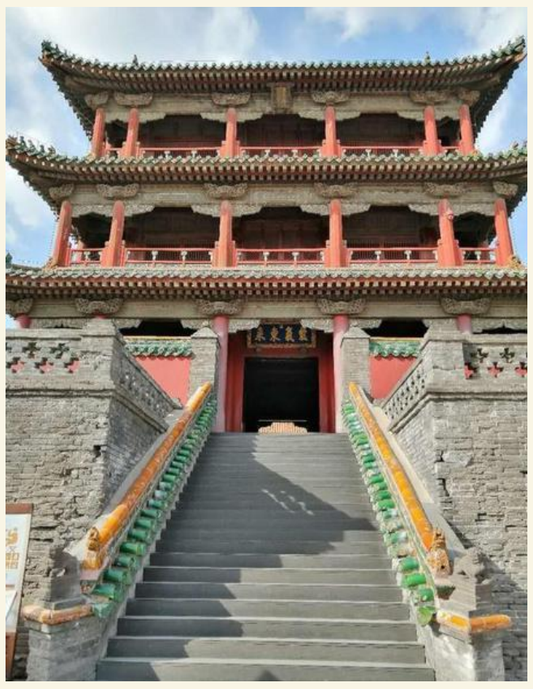
▶写真/baidu

中国の世界遺産②

b.真ん中ルートはホンタイジが元々居住している場所です。1626年にヌルハチが亡くなり、息子であるホンタイジは即位しました。ホンタイジは自分の住まいの周りにたくさんの建物を増築しました。そのうち、崇政殿、鳳凰楼、清寧宮が有名です。崇政殿は政務をとる場所です。鳳凰楼は前の宮殿と後ろの寝殿の中間地点に位置し、前後を区切る役割をしています。三階建ての鳳凰楼は、当時盛京の中で一番高い建物で、３階から盛京の全貌を見下ろすことができます。そして、鳳凰楼に六代目皇帝乾隆帝(けんりゅうてい)が書いた「紫気東来(しきとうらい)*(縁起の良いことの前兆、吉祥の前触れ)」という横額が掛けてあります。清寧宮は寝殿で、皇帝と皇后と側室が住んでいた場所です。

b.崇政殿

b.崇政殿内部



b.鳳凰楼

c.文溯閣

c.西ルートの建物は清の六代目皇帝乾隆帝が盛京に行ったとき、増築したものです。三代目の順治帝が北京に入城して以来、瀋陽故宮を離宮として使われました。乾隆帝が「四庫全書」を収蔵するために、文溯閣(ぶんそかく)が建てられました。なぜ「文溯閣」という名をつけるかというと、乾隆帝が“以水喻文，愿溯其源*(文章を水に例え、その根源に遡りたい)”という考え方を持っていたからです。また、黒が五行説の中で水を表し、水は火に克つという意味も含まれたため、文溯閣の瓦は主に黒い瑠璃の瓦が使われています。そのほか、舞台などの建物が十いくつ建てられました。

瀋陽 SHENYANG

▶写真/baidu

中国の世界遺産②

2)盛京三陵

清の時代の盛京三陵は遼寧省にあり、そのうちの二つは瀋陽市にあります。満州族清王朝の皇室を創始した皇帝とその先祖の陵墓で、福陵・昭陵・永陵の総称です。

a.福陵

福陵はヌルハチと皇后イエル―ナーラーの陵墓です。面積は54万平方メートルです。1651年に完成、その後、順治帝、康熙帝、乾隆帝などにより度々改修が行われ、皇宮建築群を形成させました。

b.昭陵

昭陵はホンタイジと皇后ボーアールジージーターの陵墓です。面積は48万平方メートルです。

c.永陵

永陵は盛京三陵の中で規模が一番小さくて、面積が1.1万平方メートルです。しかし、地位が一番高いです。なぜなら、ここは清王朝の先祖を祭る陵墓です。永陵だけは瀋陽市にありません。

a.福陵

b.昭陵

c.永陵

▶写真/baidu